

小城三月（小さな街の三月）

蕭 紅

（訳 小林美恵子）

五

翠叔母が婚約してから、またたく間に三年がたったちょうどそのとき、嫁ぎ先から知らせが来て、嫁取りの用意をしたいと言ってきた。彼女の母親が嫁入り道具を整えるために迎えにきた。

翠叔母は聞くなり病気になる。

しかし何日もしないうちに、彼女の母親は彼女を伴ってハルビンに嫁入りの準備を買い整えるために出かけた。

あいにくにも、彼女の買い物につきあって案内したのは、またも従兄が紹介した同級生だった。彼らはハルビンの秦家の高台、景色は最高で、外国人がもっとも多いところに住んでいた。

その男子学生の宿舎の中はスチームが通り、ベッドもあった。翠叔母は兄の紹介状を携えて、まるで同級の女子学生のように彼らに迎えられた。そのうえ彼らはすでにロシア人のマナーを学んでいたもので、どんな場面でも女性を尊重した。つまり翠叔母ももちろん彼らの少なからぬ尊敬を受け、ご馳走されたり、映画に誘われたりした。車に乗るときも、まず彼女を先に乗せ、下りるときは、皆、彼女を助けた。彼女が動くたびに誰もが彼女にサービスし、オーバーを脱げば受け取って片付ける。オーバーを着たいと示せばたちまち着せ掛けてくれた。言うまでもなく、嫁入り道具の買い物はうれしいことではなかったが、その数日は、彼女にとってはまあまあ、一生のうちで最も気の晴れる時間だった。

彼女はさすがに大学で勉強している人はいいい、乱暴でもなく、女性に対して無遠慮でもなく、妹の夫がいつも妹を殴るようなことは決してないと

思った。

こうしてハルビンで買い物した後、翠叔母はますます嫁に行きたくなくなつた。あの醜く、小さい男のことを思うと、恐ろしかった。

帰ってきたとき、私の母はまた彼女を我が家に迎えて泊まらせて、彼女の家は暗く、寒く、彼女はとても孤独でかわいそうだからと言つた。我家は暖かい空気に満ちていた。

やがて、彼女の母は彼女が結婚にまったく熱心ではないことに気づいた。衣裳の裁断をしなくてはならないのに、行かず、こまごましたものを買に行かなくてはならないのにやはり行こうとはしない。母親としていつも促さなくてはならず、とうとう彼女を迎えにきて連れ帰り、傍にいて注意しやすいようにした。彼女の母は若い人にはいつも注意が必要だと考えた。そうしなければ遊びに夢中になってしまう。いわんや嫁ぐ日はそう遠くはない、というか二、三ヶ月しかないのだ。

思いがけず、私の母方の祖母〔彼女の母〕が迎えに来たときに、彼女はどうしても帰ろうとせず、とうとう勉強をしたいという希望を勇敢に持ち出した。彼女は本を読みたい、嫁になど行きたくないと言つた。

最初祖母は許さなかつた。すると、彼女はもし勉強させてもらえないなら嫁には行かないと言つた。祖母は彼女の気持ちを分かっていたし、いろいろ恐ろしいことが心に浮かんた……

祖母はしかたなく彼女の言うことを聞くことになつた。ある老先生に家に来てもらい、空き部屋に机を置いて、何人かの近所の娘たちが一緒に勉強した。

翠叔母は昼間は勉強し、夜には祖母の家に帰つた。

勉強をはじめてあまり日が経たないうちに咳をするようになり、その上一日中悶々と憂鬱そうだった。祖母―彼女の母は、なにか意に沿わないことがあるのか、嫁入り道具の買い物がうまく行かないのか、あるいは私の家に遊びに行きたいのかといろいろ聞いた。

翠叔母は首を振るばかりで何も言わない。

何日か過ぎ、私の母が翠叔母に会いに、従兄を連れて行った。彼らは翠叔母に会うなり、最初の印象として彼女がひどく元気がないと感じた。母は彼女が長く生きられないと断言さえした。

皆は勉強疲れだと言い、祖母も勉強疲れだよ、何もたいしたことはない、嫁に行く女の子は、もとは痩せていても嫁いでしまえば太るのだと言った。

しかし、翠叔母はただうなずき、ちょっと笑って、認めるでもなく、否認もしなかった。まだ勉強はしていたが、我が家に来ることもなくなり、母が何度か迎えに行っても、時間がないと答え、来なかった。

翠叔母はだんだん痩せていき、従兄は祖母の家に二度彼女を見舞ったが、ご飯を食べ、飲んでひと時を過ごしたにすぎない。そのうえ、それは祖母を見舞ったということなのだ。このあたりでは若い男性が若い女性を訪問するなどはあってはならないことだった。従兄は帰ってきてもどんなうれしそうな様子もつらそうな様子も見せることはなく、いつもと変わらず皆とトランプをし、将棋を指した。

翠叔母は、その後、さらに具合が悪くなり、寝込んでしまった。

彼女の姑は彼女が病気と聞くと、すぐに娶りたがった。お金をたくさん使ったのに、死んでしまっはもったいないというのだろうか？ そんな知らせを聞いて翠叔母の病気はいつそう重くなった。婚家では彼女の病気が重いことを聞くと直ちに彼女を娶ろうとした。迷信の中にこんなものがある。病気の花嫁を娶ると邪気を払うというのだ。翠叔母はそれを聞くと、ただもう、すぐにも死にたいと願い、命がけで自分の体を痛めつけて、少しでも早く死ねればいいと思った。

私の母は翠叔母を思い、従兄を翠叔母の見舞いに行かせた。母は従兄をやるのに、いくらかのお金を翠叔母に届けるようにと持たせた。病中、好きな食べ物を買うようにというのだった。母には彼ら若者たちにこだわりがあること、翠叔母に会うのが恥ずかしいということ、また翠叔母が彼に

会いたがっていることも、彼らは長らく会えないでいることもわかっていた。同時に翠叔母が嫁に行きたがらないことについて、母はずっとひそかに彼らの気持ちを察してもいた。

男が一人で若い女性を訪ねるのはよくないとされ、この町にはそんな習慣はなかった。母が従兄に贈り物を託したので、彼は行けたのだ。

従兄が行ったその日、彼女の家にはだれもいず、ただ彼女の従妹がこの会ったことのない若いお客の相手をした。

この従妹はお客が来たわけを聞きもせず、すぐに外にひとつ走り、祖父を探してくるというので、彼を少し待たせた。多分彼女はおよそ男の客は皆祖父に会いにくるのだと思ったのだろう。

客が自分の名前を言っただけで、その娘はろくに聞きもせず出て行ってしまった。

従兄が翠叔母はどこにいるのだろうか、家の中だろうかと思っていると、翠叔母がだれか来たとききつけたのだろう、家の奥から言った。

「お入りになって」

従兄は入って行き、翠叔母の枕元に座って、翠叔母の額をちょっと触って、熱があるかないかをみようとして言った。

「具合はどう？」

彼が手を伸ばしたとたん、翠叔母は突然彼の手を引き、大声で泣き出した。まるで心の堰が切れたように。従兄は何の準備もなく、驚いた。どう言ったらよいか、どうしたらよいかわからなかった。彼には今、翠叔母の立場を守るべきなのか、または自分の立場を守るべきなのかもわからなかった。そのとき、外から物音が聞こえ、誰かが門を開けて入って来るらしい。きっと翠叔母の祖父だろう。

翠叔母は泣き止んで、彼に顔を向けて笑って言った。

「来てくれてよかったわ。お姉さんがあなたに来るように言ったのね。私はずっとお姉さんのことは忘れない。お姉さんは私を愛してくれたけど、

でも残念だけど私は会いに行けなくなってしまった……お姉さんに報いることはできないわ……でも私はいつもお姉さんのうちで過ごした日のことを思い出している……お姉さんには何でもないかもしれないけれど、私はとてもよくしてもらったと思う……ずっと忘れられないわ……私はどうしてかわからないけど、ただ少しでも早く死にたくて、一日でも生きていたくない……みんなは私がわがままだと思うかもしれないけど……それは違うの。なぜかわからないけど、夫の家は私にとってもよくしてくれ、私がもし行ったら、みんなよくしてくれるはず、でも私は行きたくないの。小さい時から、困ったことに私の性格はずっとこうなのよ。思い通りでなければしたくない……この性格は今日まで私を苦しめてきた……でもどうしたら思い通りになるの……ほんとにおかしな話……お姉さんに気にかけてくれてありがとうと……言ってちょうだいね。私はお姉さんが思っているほどつらくはないの、楽しいのって……」翠叔母はちょっと苦笑を浮かべ、「私の心は落ち着いているし、欲しいものは皆あるし……」

従兄はぼうっとしてどう言っているかわからなかった。そのとき祖父が入ってきた。翠叔母の熱を見てから、従兄の訪問に対して光栄を感じていると、私の母に感謝の意を表した。私の母に安心するように、翠叔母の病気は間もなく良くなるし、良くなればすぐに嫁に行くからと言付けた。

従兄は翠叔母がその場を立ち去るのを見た。それ以後二度と彼女に会うことはなかった。

従兄はその後、翠叔母のことになるといつも涙を流したが、彼は翠叔母がどうして死んだのかは知らなかったし、だれもが、わだかまりを抱いていた。

終章

春休みになって私が帰ると、母はやはり私に向かって言った。

「もし翠叔母さんがどうしてもお嫁に行きたくなかったら、なんとかあったはずよ。もしあの人たちが私に言ってくれたら……」

.....

翠叔母の墓の草の種はもう芽を出し、土をめくり上げながら覆って貼りつき、土饅頭は淡い緑色に見える。いつも白ヤギがそこを駆けまわっているはずだ。

このころ街中の大通りにも路地にも春が満ち溢れる。

暖かい太陽がまためぐって戻って来た。

通りには小籠を下げているタンポポ売りや、野蒜売りが現れる。さらに子どもたち、彼らは時期を見はからって、あの芽の出たばかりの柳の枝を折りに行くのだ。それはひねって笛を作るのにちょうどよく、口にくわえて街中に吹き鳴らす。音は高かったり低かったり、というのもその笛のあるものは太く、あるものは細いからだ。

あの街この街、いたるところプープーパー、プープーパー。まるで春は彼らの手の中から招かれて来るようだ。

ただしこの期間は短い。またたく間に笛を吹く子はいなくなってまう。

柳絮が飛び始めるのに続いて、ニレの実が舞い散って地を覆う。

私の故郷では春は早足でゆく。五日家を出ないと、木は芽ぶき、さらに五日見ないと葉を伸ばし、さらに五日でその木は見違えるように緑になってしまう。この木は先日のあの木なのだろうかと思わせられる。自分で自分に答える。もちろんそうだ。春はこんなふうに駆け足ですぎる。あたかも人の目に見えるかのように。春はとても遠くから走ってきて、この地までたどり着くと人の耳に小声でささやく。「来たよ」。そしてたちまち走り去っていく。春はなぜそんなに急がなくてはならないかを知らないようだ

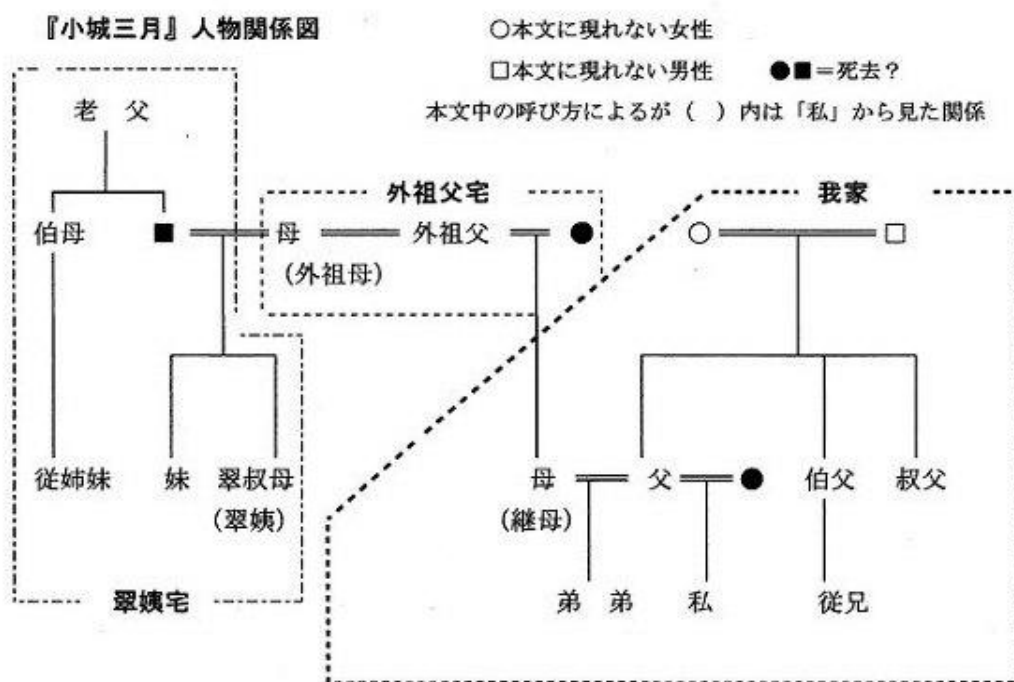
が、どんな場所も春を招き呼んでいるようなのだ。もし、ちょっとでも遅れてやってきたとすれば、陽の光は色が変わり、大地は乾いて石になるだろうし、とりわけ樹木、それはほんの一刻も耐えることができず、もし春がほんのわずかでも、どこかに名残を惜しんで留まるとすれば、多くの命が損なわれるだろう。

春はなぜもう少し早く来ないのだろう。私たちの町に来てもっと多くの日々を過ごし、そのあとまたゆっくりと他の町へと去っていき、別の町でも多くの日を留まればいいのに。

しかしそれはできないこと、春の命はそれほど短い。

若い娘たち、彼女たちは二、三人が組になって、馬車に乗り、布地を選びに行った。すぐにも春着に着替えるために。熱心に布を断ち、デザインを決め、心の中ですてきに出来上がった装いをするのを思い、昼も夜も忙しくし、間もなく春の装いに変わり始めた。翠叔母を乗せた馬車だけが見えない。

1941年



蕭紅 (1911-1942) : ハルビン出身。小説家。満洲国成立前後、これを批判し、政治的な圧迫の中で東北地方を離れて抗日文学活動を行った「東北作家群」の一人。北京、西安、武漢、重慶と、時の愛人・夫と移り住みながら作品を発表した。1935年『生死場』によって魯迅に認められ、注目されたが、死産も経験、結核を病み、香港で客死した。

『小城三月』(1941) は晩年に発表された。ハルビンの少女時代の思い出を通し、大家族の中での「翠叔母」の恋を描く、女性的な視点の色濃い作品である。

本訳に使用したテキスト : 『小城三月』北京 : 中国文联出版社, 2005, pp1-47.



(中国語原文) 小城三月 蕭紅

五

翠姨订婚，转眼三年了，正这时，翠姨的婆家，通了消息来，张罗要娶。她的母亲来接她回去整理嫁妆。

翠姨一听就得病了。

但没有几天，她的母亲就带着她到哈尔滨采办嫁妆去了。

偏偏那带着她采办嫁妆的向导又是哥哥给介绍来的他的同学。他们住在哈尔滨的秦家岗上，风景绝佳，是洋人最多的地方。那男学生们的宿舍里边，有暖气，洋床。翠姨带着哥哥的介绍信，像一个女同学似的被他们招待着。又加上已经学了俄国人的规矩，处处尊重女子，所以翠姨当然受了他们不少的尊敬，请她吃大菜，请她看电影。坐马车的时候，上车让她先上；下车的时候，人家扶她下来。她每一动别人都为她服务，外套一脱，就接过去了。她刚一表示要穿外套，就给她穿上了。

不用说，买嫁妆她是不痛快的，但那几天，她总算一生中最开心的时候。

她觉得到底是读大学的人好，不野蛮，不会对女人不客气，绝不能像她的妹夫常常打她的妹妹。

经这到哈尔滨去买嫁妆，翠姨就更不愿意出嫁了。她一想那个又丑又小的男人，她就恐怖。

她回来的时候，母亲又接她来到我们家来住着，说她的家里又黑，又冷，说她太孤单可怜。我们家是一团暖气的。

到了后来，她的母亲发现她对于出嫁太不热心，该剪裁的衣裳，她不去剪裁；有一些零碎还要去买的，她也不去买。做母亲的总是常常要加以督促，后来就要接她回去，接到她的身边，好随时提醒她。她的母亲以为年青的人必定要随时提醒的，不然总是贪玩。而况出嫁的日子又不远了，或者就是二三月。

想不到外祖母来接她的时候，她从心的不肯回去，她竟很勇敢地提出来她要读书的要求。她说她要念书，她想不到出嫁。

开初外祖母不肯，到后来，她说若是不让她读书，她是不出嫁的。外祖母知道她的心情，而且想起了很多可怕的事情……

外祖母没有办法，依了她。给她在家里请了一位老先生，就在自己家院子的空房子里边摆上了书桌，还有几个邻居家的姑娘，一齐念书。

翠姨白天念书，晚上回到外祖母家。

念了书，不多日子，人就开始咳嗽，而且整天的闷闷不乐。她的母亲问她，有什么不如意？陪嫁的东西买得不顺心吗？或者是想到我们家去玩吗？什么事都问到了。

翠姨摇着头不说什么。

过了一些日子，我的母亲去看翠姨，带着我的哥哥。他们一看见她，第一个印象，就觉得她苍白了不少。而且母亲断言地说，她活不久了。

大家都说是念书累的，外祖母也说是念书累的，没有什么要紧的；要出嫁的女儿们，总是先前瘦的，嫁过去就要胖了。

而翠姨自己则点点头，笑笑，不承认，也不加以否认。还是念书，

也不到我们家来了，母亲接了几次，也不来，回说没有工夫。

翠姨越来越瘦了，哥哥去到外祖母家看了她两次，也不过是吃饭，喝酒，应酬了一番。而且说是去看外祖母的。在这里年青的男子，去拜坊年青的女子，是不可以的。哥哥回来也并不带回什么欢喜或是什么新的忧郁，还是一样和大家打牌下棋。

翠姨后来支持不了啦，躺下了。她的婆婆听说她病，就要娶她，因为花了钱，死了不是可惜了吗？这一种消息，翠姨听了病就更加严重。婆家一听她病重，立刻要娶她。因为在迷信中有这样一章，病新娘娶过来一冲，就冲好了。翠姨听了就只盼望赶快死，拚命地糟蹋自己的身体，想死得越快一点儿越好。

母亲记起了翠姨，叫哥哥去看翠姨。是我的母亲派哥哥去的，母亲拿了一些钱让哥哥给翠姨去，说是母亲送她在病中随便买点什么吃的。母亲晓得他们年青人是很拘泥的，或者不好意思去看翠姨，又或者翠姨是很想看他的，他们好久不能看见了。同时翠姨不愿出嫁，母亲很久的就在心里边猜疑着他们了。

男子是不好去专访一位小姐的，这城里没有这样的风俗。母亲给了哥哥一件礼物，哥哥就可去了。

哥哥去的那天，她家里正没有人，只是她家的堂妹妹应接着这从未见过的生疏的年青的客人。

那堂妹妹还没问清客人的来由，就往外跑，说是去找她们的祖父去，请他等一等。大概她想是凡男客就是来会祖父的。

客人只说了自己的名字，那女孩子连听也没有听就跑出去了。

哥哥正想，翠姨在什么地方？或者在里屋吗？翠姨大概听出什么人来了，她就在里边说：

“请进来。”

哥哥进去了，坐在翠姨的枕边，他要去摸一摸翠姨的前额，是否发热，他说：

“好了点吗？”

他刚一伸出手去，翠姨就突然地拉了他的手，而且大声地哭起来了，好像一颗心也哭出来了似的。哥哥没有准备，就很害怕，不知道说什么，作什么。他不知道现在应该是保护翠姨的地位，还是保护自己的地位。同时听得见外边已经有人来了，就要开门进来了。一定是翠姨的祖父。

翠姨平静地向他笑着，说：

“你来得很好，一定是姐姐告诉你来的，我心里永远纪念着她。她爱我一场，可惜我不能去看她了……我不能报答她了……不过我总会记起在她家里的日子的……她待我也许没有什么，但是我觉得已经太好了……我永远不会忘记的……我现在也不知道为什么，心里只想死得快一点就好，多活一天也是多余的……人家也许以为我是任性……其实是不对的，不知为什么，那家对我也是很好的，我要是过去，他们对我也会是很好的，但是我不愿意。我小时候，就不好，我的脾气总是，不从心的事，我不愿意……这个脾气把我折磨到今天了……可是我怎能从心呢……真是笑话……谢谢姐姐她还惦着我……请你告诉她，我并不像她想的那么苦呢，我也很快乐……”翠姨苦笑了一笑，“我心里很安静，而且我求的我都得到了……”

哥哥茫然地不知道说什么。这时祖父进来了。看了翠姨的热度，又感谢了我的母亲，对我哥哥的降临，感到荣幸。他说请我母亲放心吧，翠姨的病马上就会好的，好了就嫁过去。

哥哥看了翠姨退出去了，从此再没有看见她。

哥哥后来提起翠姨常常落泪，他不知翠姨为什么死，大家也都心中纳闷。

尾 声

等我到春假回来,母亲还当我说:

“要是翠姨一定不愿意出嫁,那也是可以的,假如他们当我说。”

.....

翠姨坟头的草籽已经发芽了,一掀一掀地和土粘成了一片,坟头显出淡淡的青色,常常会有白色的山羊跑过。

这时城里的街巷,又装满了春天。

暖和的太阳,又转回来了。

街上有提着筐子卖蒲公英的了,也有卖小根蒜的了。更有些孩子们他们按着时节去折了那刚发芽的柳条,正好可以拧成哨子,就含在嘴里满街地吹。声音有高有低,因为那哨子有粗有细。

大街小巷,到处地呜呜呜,呜呜呜。好像春天是从他们的手里招待回来了似的。

但是这为期甚短。一转眼,吹哨子的不见了。

接着杨花飞起来了,榆钱飘满了一地。

在我的家乡那里,春天是快的。五天不出屋,树发芽了,再过五天不看树,树长叶了,再过五天,这树就像绿得使人不认识它了。使人想,这棵树,就是前天的那棵树吗?自己回答自己,当然是的。春天就像跑的那么快。好像人能够看见似的。春天从老远的地方跑来了,跑到这个地方只向人的耳朵吹一句小小的声音:“我来了啊,”而后很快地就跑过去了。春,好像它不知道多么忙迫,好像无论什么地方都在招呼它,假如它晚到一刻,阳光会变色的,大地会干成石头,尤其是树木,那真是好像再多

一刻工夫也不能忍耐,假如春天稍稍在什么地方留连了一下,就会误了不少的生命。

春天为什么它不早一点来,来到我们这城里多住一些日子,而后

再慢慢地到另外的一个城里去，在另外一个城里也多住一些日子。

但那是不能的了，春天的命运就是这么短。

年青的姑娘们，她们三两成双，坐着马车，去选择衣料去了，因为就要换春装了。她们热心地弄着剪刀，打着衣样，想装成自己心中想得出的那么好，她们白天黑夜地忙着，不久春装换起来了，只是不见载着翠姨的马车来。

1941 年

.....

萧红 (1911-1942) : ハルビン出身。小説家。満洲国成立前後、これを批判し、政治的な圧迫の中で東北地方を離れて抗日文学活動を行った「東北作家群」の一人。北京、西安、武漢、重慶と、時の愛人・夫と移り住みながら作品を発表した。1935 年『生死場』によって魯迅に認められ、注目されたが、死産も経験、結核を病み、香港で客死した。

『小城三月』(1941) は晩年に発表された。ハルビンの少女時代の思い出を通し、大家族の中での「翠叔母」の恋を描く、女性的な視点の色濃い作品である。本訳に使用したテキスト:『小城三月』北京:中国文联出版社, 2005, pp37-47.

□□□□□